

特57  
536

戎座卯の三月  
二の替り狂言

俳優評判記

074882-000-8

特57-536

俳優評判記

(戎座卯の三月二の替り狂言)

戸倉 忠雄/編

M12

CEK-0311



緒言

おはよそ世の中よ人を感動せしむべきものは書あるが書  
 得讀ぬ人はいかにもせんそへはわらじ言語の人に適切  
 なると書よも勝りぬべしといへ能訥の差もあれを一概  
 に毛論すべからず只世よ演劇てふ物あり能く人の性情に  
 從ふて其趣を演ぶ喜ぶべきは喜ひ悲むべきは悲み善惡勸  
 懲の道本舞臺三間の中よ備り因果應報の理一日數幕の間  
 よ具す人を感動するの具何かはこれおたくべん是をも  
 て西洋文明の俗も演劇よもて無用の翫具とせず却て風教  
 の萬一に裨補するものとし王侯貴人の貴さより匹夫下  
 郎の賤しさよ至るまでこれを賞でこれを勸めて以て其盛  
 昌を期せざるなま日本の如さと演劇の風殊に衰へ俳優の  
 俗大に頽れいりる演劇あるものは婦女と淫佚に導くの  
 毒物とあり學士紳士を問はざしく風教お心ある者は賤  
 しめて以て社會に齒せざるよいたれりこれ將誰が罪ぞや  
 西洋各國はいふも更なり我國往昔の劇師俳優と稱するも  
 のは皆學識あり志尙あり以て一家一門の宗祖とあり前代  
 未發の新技と演じて當時の喝采を博せざるなり今の俳優  
 優あるものは僅かに前師の糟粕を嘗めて以て兒女子の憐  
 と乞ふものなりその技の下れるその風の衰へたることを

にかばこれ怪まん只東京と全國の中心開化の先鞭あるを  
 もつてや俳優者流亦一而目を改め殆ど西洋各國の演劇も  
 競はんとするもの、ごとし就中九代目市川團十郎のごと  
 き非凡の絶技をもつて夙此道を改正せんと欲するの志  
 あり居常書と讀み文を談じ廣く上流の紳士新聞の記者等  
 と交と結び一技を演ずるも苟もせせ一語を發するも忽も  
 是る處なしこゝをもて他の俳優者流も亦靡然として其風  
 を倣ひ菊五郎の如き宗十郎の如き左團治の如き仲藏の如  
 き皆駭々乎として開明の旨に従はんことと勤めざるもの  
 あり又作者に川竹翁あり座元に守田勘彌あり能く上流紳  
 士と謀りて以て其劇の善美を期せんとと嗚呼何を盛るる  
 や然るよこれ大坂のごとき演劇の根本に誇るの地おして  
 作者の務る處徒に古狂言の燒直しに過ぎず(偶新作を演  
 するにもせよ)俳優の勉むる處空く愛を婦女子に全ふす  
 るの外おしその東京演劇の地位と相拒ること座頭と馬の  
 足音ならざるを知るべし何ぞ顧みざるの甚しきや頃日俳  
 優評判記の記者來て序と講ふ書して以て式三番更も換ふ  
 罵詈惡口ハ案山子れ十八番あらんか


 泰養 嵐 嵐 嵐


 泰養 隆 隆 隆


 泰養 中村 鶴


 泰養 市川 團十郎


 泰養 盛 盛 盛


 泰養 中村 鶴



中

中



中

中



中

中



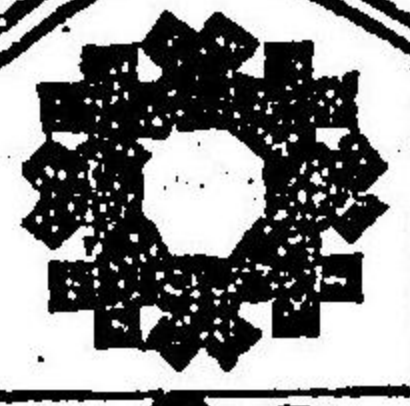
中

中



中

中



中

中



中

中



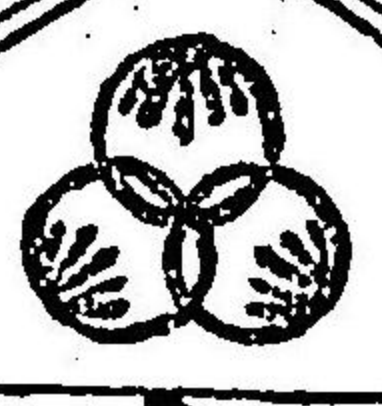
中

中



中

中



中

中



中

中



中

中



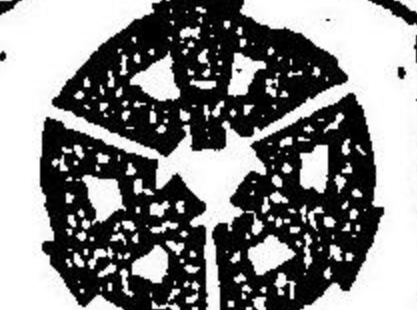
疾

守如義藏



疾

宗如義藏



疾

神如義藏



疾

春如義藏



疾

宗如義藏



疾

宗如義藏

頃ころは建久けんきう四ツよつの年としえかも更夜よるの阜月ふつき晴はれ其その名なも雲井くもゐの高根たかねなる富士ふじの裾野すそのに兄弟けいだいが本意ほんゐと達たつする三國さんごく一の仇討あだうちれ曠はれ摸様もようは

てぢちどりそかのじつろく  
**蝶千鳥曾我實録** 本望ほんぼうに因よみて十段じゅうだん續つづる

第一 平野社ひらのやしろに祐繼ゆけいが遺書いしよの歎訴なげなげ訟そう  
別當所べつどうじよに祐親ゆけいが分地ぶんちの虛承知そらせうち

第二 奥野狩おくのかりに祐信ゆけいが捕物あそびの放生鳥はなしどり  
赤澤山あかさわやまに祐泰ゆけいが横死よこしれ無主箭あなれや

第三 箱根社はこねのやしろに頼朝よりとむが武運ぶくわんの御奉幣みてくら  
廣書院ひろしよいんに祐經ゆけいが恩賜おんしの赤木作あかぎづくり

第四 方丈室ほうじょうむろに行實ゆきまが寸志すんしの友切丸ともぎりまる  
鳥居前とりあまへに箱王はこおうが奔發はなはらの力量業りきやうご

第五 北條館ほくはうくわんに義時よときが明察あきさつの唐詩句たうしきう  
離閑席りかんせきに時政ときまさが深意しんいの加冠親かかんちん

第六 小動堤こもうづみに満江まんえが折檻せつがんの小位牌こゐはい  
庚申堂こうしんどうに小將せうしやうが目送めおくりの垂簾籠たれしやご

第七 大磯邸に義盛か一族の園樂會  
酒宴席に朝夷か猿樂の草摺引

第八 奥座敷に虎女か愛別の痴情語  
鴨立澤に道三か忠義の太力打

第九 祐信館に鬼王か苦節の手仕事  
曾我邸に實永か鷄聲の血死期

第十 工藤屋に十郎か恩辱の偽誓言  
假本陣に五郎か復讐の押問答

○序幕役人替名

工藤一筋祐經	嵐	橋り之助
伊藤次郎祐親	實	川 鴈 若
同 九郎祐清	嵐	川 寛 齋
小松内府重盛	實	川 新四郎
伊豆次郎祐兼	嵐	山 運右衛門
御臺花園御前	中	實 川 一 德
工藤内室光江	實	大 谷 龍左衛門
大見小藤太	實	川 菊 齋
八幡三郎行氏	實	川 菊 齋

○洛陽平野神社の塲

○舞臺は石の玉垣正面廻廊石燈籠樹木の植込等都て平野  
神社の体神樂囃にて幕明く仕丁三人例の相文句エテく  
有て引込爰へ伊藤祐親同祐清二人今日平相國清盛公の名

代として小松重盛公當社へ御社參あるを幸ひ歸國の暇乞  
に來る工藤の妻光江は能折柄と所領の事を兄の祐清諸共  
頼と祐親は聞入を却て光江に離縁せよと云ふ祐清光江  
しきりみ歎き悲めど少しもさかす其儘上手にはいる處へ  
工藤祐經烏帽子半素袍伊豆の次郎祐兼旅の拵へ郎等二人  
出に成り本舞臺にて祐兼之母親病死云々々河津伊東宇佐  
美の三ヶ莊を祐經十五才になれを伊東より渡すと云ふ父  
が遺書と祐經は渡す祐經は是を證據お重盛公お歎願して  
有無のお札を請んと兩人いさむ見得よて道具替る  
○道具替て同別當所の塲

正面ぬり骨障子家体半簾金襴都て別當所の大書院の体二  
重の真中へ重盛公金烏帽子した、れ差扱後へ振袖小性二  
人太刀を持ち平舞臺両方に伊東祐親工藤祐經以前の拵に  
て控へ居る管絃入の鳴物めて道具止る重盛公と兩人の趣  
意と糺し伊東工藤の和義を斗り宇佐美の莊を工藤に譲る  
べしと仰を兩人畏こまり祐親と歸國れ上奥野に狩を催し  
たまふ願ふ重盛と歸國の事と許すど、重盛公へ小性とつ  
れ上手ぬらいる以前の祐清光江いで、両家の和義を悦ぶ  
祐親と一ヶ莊を譲らぬと云ふ皆と驚く祐親と光江お又も  
や離縁せよと迫る光江と其道欲を歎く祐親へ悪口と吐き

あから光江祐清をつれて道入る祐經無念のこなし以前の祐兼づか〜と出て向ふへ行ふとぞる祐經これと呼止め夫より兩人と道中あて祐親を討んど密々喋し合ふ處にて又替し

○道具替つて野洲河原の場

舞臺一面荒川の書割り浪打際蛇籠上下手芽原松の立木同く釣枝都て江州野洲河原の体真中に伊東祐親半素袍袴股立にて床机よか、り居る下手は九郎祐清同し出立相引よ掛り居る上手は長棒の乗物とぞへ陸尺二人家來二人矢張半素袍都て旅の拵へ下手は川越し人足四人手をつかへ居る此見得浪の音驛路の相方よて道具止る祐親と川越の者お祐經を蛇魔して止めて呉よと頼むことあつてとぞ皆く上手に這入矢張浪音よなりハタ〜にて向ふより工藤兄弟半素袍の肩をはね高腹立にて長刀をもち出て來り漁師よ尋ることあつて川越大勢出て工藤兄弟と大立廻りよろしく有つて上下手に追こみ無念の思入れ此の時川とめ〜と大勢云ふ兩人怖りして長刀を捨て口惜がる此時上下は若原大見小藤太八幡の三郎着附かるさん大小の拵へ出て出にあり工藤兄弟よ久々の對面の話あつて私者兩人よて伊東親子を急度討果して御無念を晴し舛と請

あふ工藤と祝ひ奥野の狩を幸ひ討て呉れと頼む段にて幕  
○序切役人替名

- |        |         |
|--------|---------|
| 曾我太郎祐信 | 嵐璃運右衛門  |
| 伊東次郎祐親 | 實川 鷹若   |
| 同 九郎祐清 | 嵐 川 寛藏  |
| 河津三郎祐泰 | 中村 津多比  |
| 土肥次郎實平 | 中村 芝五郎  |
| 大見の小藤太 | 大谷 龍左衛門 |
| 八幡の三郎  | 實川 菊藏   |
| 富田 道三郎 | 嵐 橋久二郎  |

○奥野狩倉の場

舞臺真中丸木造りの冠木門上下草土手へ柵矢來み山形庵は木瓜紋紋幕を張り矢來上下手の角お伊東祐親遊獵団地と書したる傍示杭を建て所々お松の立木同く釣枝都て奥野狩家外拵の体爰いせんの大見八幡の兩人獵師の拵へ弓矢を持立掛り居る是を勢子四人割竹を持ち双方より詰よつて居る此間だ山嵐の相方あて幕あて勢子の者は兩人のわやしき姿を咎め狩家の引立んと云ふ殆んど難義よ及ぶ所へ曾我太郎祐信半素袍附太刀の拵へあて出よなり兩人を救ひて歸す此處は祐親始め何れも半素袍小サ刃中啓を持出にあり遊獵の禮云ふあり〜股野河津の角力争ひも大場が扱ひにて濟之故和義取結びて盃を假家にて催さんと祐清に勝はれ皆く門の内よ這入る山嵐はた〜とて以前の大見八幡走り出先程の角力の時と幸ひ討取んと

せし見答られし上と歸りを待て遠矢掛て討んと云合せ  
る處にて道具廻る

道具替つて柏峠の場

高二重岩山のけこみ上下とも岩山の出しかけ向ふ一面山  
の書割二重の真中桃らへの椎の木三本同く松杉の鉤枝都  
て柏峠絶頂の体山風一せいで道具止るをたぐに  
ていせんの大見八幡弓矢を携へ一さんに走りいで来りド  
二人と本舞臺の四敷處まで河津祐泰が通行を見掛け首  
尾よく射蕩る處まで道具替る

○道具替つて赤澤山麓の場

舞臺一面お嶮峻なる岩山真中瀧の書割所々に枯尾花松  
の立木釣技上下とも敷た、み都て赤澤山麓の体河津三郎  
弓小手むかばぎ狩倉の形腰のつがひに矢を立門絶あした  
る体以前の伊東始皆々狩倉の形りにて河津を介抱な玄呼  
ひいけて居る勢子並び居る山麓こだまの相方にて道具止  
る皆々と河津と介抱玄呼いける件より敵は工藤の家來の  
大見八幡ありと知り祐清は勢子をつれ大見八幡を探索さ  
んと上手の這入よりド、河津は祐信に我子の養育を頼み  
又一族の人々に親の事を頼む大愁歎の處へばさく、よて  
道三郎と乳子と懐に入れ出て来り満江か安産の事を咄す

件より祐清が大見八幡の首を取り歸り物語云々有りト、  
祐親が道三郎其方兄弟は思み明き次第満江諸ども曾我  
邸へ行と云付るト、河津は落命とる皆々愁の思入十分有  
つて風の音兩車にて幕

記者曰く是れまでのところは相中俳優のみよて別段評  
するどころもなければ態と評言は省き只狂言の脚色と  
知すまでお粗その筋のみを掲ぐ又次の幕はこれより十  
五年立迄ところあり看客そのお積りにて御覽あれかし  
例の通り評言の○印と社評 △印は役書なり先と其爲  
め口上左様

○箱根山對面の場

箱根權現別當客殿の体幕の内より役僧信良袈裟鼠衣け  
拵へ腰衣の同宿四人と左右別れて扣へ居る此兒得本行  
の音楽まで幕明く信良「イカニ同宿かたぐ今日と黍  
くも右大將頼朝公御武運長久祈願の爲當權現へ御社參と  
のこと最早御出も間も有まじ急ぎお席設けを」云との  
言語あり同宿四人畏つて御坐りますとそれく用意の  
處へお入成と觸込あり是と切掛に唄入の音楽も成り向ふ  
より右大將頼朝御輪唐草の狩衣金冠差振りの例式の衣  
裳中啓を持って出ふなり次に小役の太刀持其跡より千葉、

○箱根山對面の場

箱根權現別當客殿の体幕の内より役僧信良袈裟鼠衣け  
拵へ腰衣の同宿四人と左右別れて扣へ居る此兒得本行  
の音楽まで幕明く信良「イカニ同宿かたぐ今日と黍  
くも右大將頼朝公御武運長久祈願の爲當權現へ御社參と  
のこと最早御出も間も有まじ急ぎお席設けを」云との  
言語あり同宿四人畏つて御坐りますとそれく用意の  
處へお入成と觸込あり是と切掛に唄入の音楽も成り向ふ  
より右大將頼朝御輪唐草の狩衣金冠差振りの例式の衣  
裳中啓を持って出ふなり次に小役の太刀持其跡より千葉、

○箱根山對面の場

箱根權現別當客殿の体幕の内より役僧信良袈裟鼠衣け  
拵へ腰衣の同宿四人と左右別れて扣へ居る此兒得本行  
の音楽まで幕明く信良「イカニ同宿かたぐ今日と黍  
くも右大將頼朝公御武運長久祈願の爲當權現へ御社參と  
のこと最早御出も間も有まじ急ぎお席設けを」云との  
言語あり同宿四人畏つて御坐りますとそれく用意の  
處へお入成と觸込あり是と切掛に唄入の音楽も成り向ふ  
より右大將頼朝御輪唐草の狩衣金冠差振りの例式の衣  
裳中啓を持って出ふなり次に小役の太刀持其跡より千葉、





小山、結城、蒲田、澁谷、土肥、長尾、海野、宇都宮、諸大名何れも素袍大紋立烏帽子の拵にて附添花道に居併ふ役僧信長頼朝も出迎に挨拶とする頼朝と源家累代當社の権現を信仰する由來と述べ自分も亦武運長久祈念のため社參する云々の言語あり夫より諸大名一同例の詞臺終つて皆舞臺に掛り頼朝と二重舞れ上に座としめ諸大名と時勢と談する臺詞あり大江島山兩人が登山の遅さを訝る處、「アイヤいづれも大江大膳太夫廣元、島山庄司二郎重忠只今參上と聲と掛け兩人の嫡男大膳之亮廣仲六郎重保出にあり父の名代お來りし由を述べ兩人舞臺に掛り二重の下お居併ふ○是までい處サシテ評する處もあし頼朝とシツトリとしたところ十分賞目が見へました△錦の差抜はいうが是は無地物でありそふなもの廣仲重保兩人共當時若手の賣出之綺麗あることは元より申すまでもなく中々落着てやられままたが取譯廣仲は一入巾が見へました爰へ當社の別當行實阿闍梨襟立衣七條の袷袢にて小幕より立出る頼朝と當社の寶庫に納めある友切丸の太刀を所望する、行實は態と賊の爲に奪はれしと云ふ○行實と緋の襟立衣を着ながら差抜を穿ぬといか、△頼朝への挨拶より友切丸紛失とし旨を言上する處サスガ老功もえ年頃とい

ひ仕打といひ落着たる事詞廻り蕪みあること申分無れども一体身体に品格なく所謂眼光人を射るといふ凄じき顔色もある此様な事は不適任ドコヤラ底は一物有氣も見へ箱王を愛育せらる、やうな實意ある方丈と見えへす□人々頼まれて頼朝でも呪咀あし又友切丸の太刀もドウも自身で藏してゐるかと思おれました此處は戸屋口の杉戸を明け河津祐泰が遣兒の箱王丸振袖の兒姿にて列坐の諸大名の其中に怨敵工藤祐經と居らぬかと窺ひよ來る○お定まりの目尻へ紅の極込でなくトノコに墨の隈取兩三年前東京にて九代目團十郎が扮粉し風を摸擬してやられし感心△△皮相だけと摸擬したが肝心の内部が○オット東西サマ顔の拵へはマツ好しとして衣裳と別に何か據處があつてのお誂へか知れませんが蝶の繻といかいなものには矢張り紅葉と鹿の摸擬の方が好サそふと思おれま△△戸屋口からソロソロ出て來た様子は何か落物でもしといふ見得もあり又含燈提燈を持せたいどころもありました○頼朝は箱王丸と見答がめいらく問答ありト、列坐れ内ふ祐經のねらぬといふを行實より聞て箱王と力の振え思入所へ向より「祐經殿はお入りと呼ぶ此聲を聞て箱王丸は向ふを見返り急度思入有て「何祐經殿の登山せ

しどなとスツと立て行ふとするは行實は中啓と以て舞臺  
お招き「コリヤ必疎相のあいやうふ」心得て候ト是より  
對面三重ふなり箱王又行ふとどるを行實これを氣遣ひ是  
へまのれといふこなし箱王よんごころなきこあしにて是  
非なく舞臺へ來り下手よ扣へる此内向ふより祐經素袍大  
紋立烏帽子の拵めて出て來る技抄有て舞臺よ掛らんとど  
るを箱王丸ツカくと立て花道の附際ふムツと座し急  
度思入祐經これを見て「ソナヤ何者あるぞ」當山は兒箱王  
よて候「何當山の兒とな」箱王丸の顔をデット詠めハテ  
サテ能も似たはく「似たとと誰に似ましたナ」此祐經  
とと一家なる河津の三郎祐泰に似とと思か其人よ再び  
出會ふ心地こそすれ何ソと我君能くも似たたではムりませ  
ぬか頼朝實に其方が詞めて思ひ出す三郎祐泰が面体あ  
寸分違はぬそれなる小冠者祐經ソヤツと取逃とを「ハ、  
ハツと兩人氣味合あつて祐經素袍の袖をはね大手を廣げ  
て急度なる是を矢張對面三重よて箱王祐經に囲まれてし  
づくと舞臺に來り入替つて行ふとするを祐經箱王の首  
筋と取へる行實祐經とさへて箱王を圍ひ三人急度思入  
是を切掛に音樂になる○祐經はサヌガ老功昔しより多く  
の名人上手と同坐をされし八丈あつて落着といひ意氣込

といひ格別なる處も見へたれせも年がお年もある少し老  
人よき夫に人体も余り上品ならず曾我物語に記したる一  
年の頃は四十餘りと見へて色白く清氣ある男の類魂常あ  
らず見へたり云々の本文あわわして不都合なり且は音  
聲の濁りしお人もる臺詞廻し爽やかならず京家に長く奉  
公せし優美の侍ひとと思はれず△頼朝の命を受て箱王を  
迎さぬやまごの思入か大手を廣げて詰寄せられたのと余  
り仰山すぎ小供遊びの親とろ子とろだといふ評をしたも  
のがありましたがアレ程よせすとも今すこし落着た仕打  
のありそふなものを箱王ハ祐經の來るを迎て花道の附際に  
ドツカと坐を占め祐經の顔を急度見上げ「似たとと誰に  
似ましたとと大音聲でいふところけ意氣込みより後さま  
に膝行つて本舞臺よかゝる間威風凛々英氣勃サヌガ大  
立物の眞目が見へました○是より祐經行實いろく問答  
もつて箱王と伊東の孫河津の倅とあつて首を刎ね心さら  
ぬと説への相方よなり頼朝と其昔流人の折柄箱王の祖父  
伊東祐親が已に辛かりし云々の長臺詞もつて終に吾目通  
にて首を刎よといふ○長官と調子よく甘く廻とされ  
余大音やら上品もまて能く聴へました○爰へ暫く  
と聲と懸け曾我の郎尊鬼王庄司左衛門走りいで花道の真

中に坐り〇トノ仕立れ顔の拵へ摺元まの長木綿紋附の着流し紺足衣柄糸のはつれ袴の劔たる刃まで貧製廻りし容体拵し得て妙々△只頼朝始め列坐の諸大名一同何も時代拵への拵中へ此人をかり拵のある程に着流しの衣裳世話の拵へもあ目移りよろまからず今少し工風のさいものか〇夫より祐經は向ひ一門の好意に箱王の命乞をしてたまこれ頼む祐經は一家たる好意を以てもどより助命を願ひ申さぬにあらねども是より故己が履歴より伊東祐親が己に對して非分のこととなせし一五七十を陳述て表と箱王が助命を願ふやうにして却つて頼朝の怒を添て之と失んどとる奸惡の思入〇前も評えた通り意氣込と落着とに申分りあけれども如何にも邪智奸佞などころが表も願れをきて辨佞利口を以て名を得たる祐經とは思これす維と露に入たといふやうな工合も今少ま表面も仁義を飾り内心も奸惡を合で偽君子風に違つて貴ひたかつた〇頼朝と祐經の佞辨に説きされていよ激怒を増し廣仲・重保・行實三人の愁訴を聞入す爰に於て鬼王はいよ／＼驚きまぞ／＼愁ひ「ソリヤ何れも様のお力にも助命の議と叶ひませぬかと面へうねし思入にておそる／＼舞臺に進み千葉小山を始め列坐の諸大名も向ひ一

々其名と呼び掛け舊主伊東と舊好ありしことを教へたて其交誼を思ひて箱王の助命を願ふて賜はれと涙ながらに頼み入る〇鬼王は持前の言語廻し此さういふ愁嘆ごどにかけては此先生に限りませ只江名井れ前も坐つただけの不都合今少し引下り臆病口の前の處へ坐つたら格別怒然と見へ今一段も二段も愁ひが利さましやう〇列坐の諸大名頼朝の怒りを恐れ薄情も庄司左衛門が愁訴を聞ぬふりよて何れも側を向く庄司左衛門は口惜しさをなしあつて箱王と顔見合せ「和子様」鬼王「頼の綱も切れたるか泣入る處へ向ふより何れも待つ」其大刀どりと畠山庄司重忠仕つらんと聲と掛て出よなる重忠桐の葉の定紋を細に染抜た草色の大紋茶色ノの小袖いかにも上品ある拵へよろそく藝のこゝろしといひ察着る様子座頭の貫目の十分見へました△花道へ立どたかつての挨拶と頼朝公に對きてナト失敬では御座らぬか是は低頭平身して扱しづく／＼と進んで然るべきこと、思はれまそ〇夫より二重の下座を占め和漢の故事を引り利害得失と辨じ夫とはるまゝ頼朝を諷諷し祐經の奸情を説破る間も辨舌爽どいふ程でもなければ好く句頭の切れし言語にて小しもたもみろくやられたとサヌカ井筒屋の隊長△然しナト強そ

きて賢人の氣象は見へるアノアノ頼朝と感動させること  
は覺束あいの頼朝は重忠の諫よ迷夢を覺され祐經も其理  
み勝れき終に箱王を許して行實阿闍梨預る鬼王は之を  
喜び箱王丸出家れことを行實頼む之よ因て頼朝はいよ  
く箱王が助命と聞き是より頼朝始め列坐の諸大名箱  
王鬼王行實に至るまでそれく割言語あつて箱王鬼王の  
兩人を戮し皆々頼朝に附添ふて奥へ遣入る○此處に割言  
語は刀づくしで中くさまく出来てのままたが頼朝公や  
諸大名が役拂ひひみだ地口をいふやぎで却つて不都合過  
たるに備及をさるが如きとは此事か△又引込の駒子が余  
り陽氣過て諸大名が踊つて遣入らなければならぬ様だッ  
との大笑ひ○叔箱王と祐經の引込む跡と見送つて遺恨  
に耐ぬ思入己に奥へ踏込んどそるを鬼王と之を抑留め是  
より兩人誂の相方に成り鬼王は母刀自滿江の意を傳へて  
箱王よ出家を勸める○老實な忠臣の思入好く出来ました  
此人に限り心底から其人に成りたましてやらる、故自然  
に言語の序破急も調ひ看客は感ぜも又一入○箱王鬼王の  
諫めと容を剛情と言張る様子○ナツと頑童じみとぎたが  
先大体○是より兩人いろくと押問答あり、(箱)昔の  
錦に引替で(鬼)木綿布子の一挺羅(箱)袖に涙の乾く間も

(鬼)あさ父君の忘日を迎へ(箱)出家あ身身の箱王が(鬼)  
心の中を思ひ遣られて(箱)鬼王(鬼)若君様(箱)あぢさな  
き身の成行じやあアと兩人涙に呉れる折柄○鬼王は親味  
よ泣てゐるやうな仕打の頗る出来ましたが一度も涙を試  
いふことを見掛けませなんだ餘り車輪にあり過て其余地  
が無つたと思へまぞ○奥より以前の祐經が出て來り兩人  
のゐるよ氣の附ぬ振にて態と惡口を言散しヤガテ始めて心  
附し風情よて兩人よ言どけ改て對面ふ成り祐經と親と  
なくとも子は育つ云々の意詞ある其驥尾について敵役の  
取巻太名共いろくど兩人を愧しめ祐經に彼等お相手あ  
あらずと奥へゆけど勸める祐經これに隨ひ奥へ行んどそ  
る處を箱王呼留め是か(祐)(箱)兩人詰合にありト、祐經  
と初見參の引出物なりと赤木造りの短刀を興へる箱王は  
これを受け(箱)ヤガテ敵の首こそ是めて(祐)ヤと急度思  
入ナニツと附廻りアツて鬼王中に立入り「アイヤ重く  
の恩賜の賜△オツト重言イヤ此人をかりではない先ふ祐  
經も頼朝公に向つて奥庭の眺望と御覽あそばせと御叮嚀  
におやらかしお遊をされた○オツと言語過としては際限  
あるべからずだから大抵は處は大目であら大耳お聞流  
すべしサ○(然ば工藤)祐經どの(祐經)「はて珍らし(鬼)

王)御對面で御坐りまると此見得にて道具廻る○祐經憎  
い處と十分見へたが格別評する處もなし○箱王と剛味餘  
りあつて情愛足らせ入舌足らずの様多言語であまへた仕  
打は鬼王が祐經へ箱王を取成す言語に「形は大きき見へ  
ましても母親育ての箱王丸と謂つたれに好く適當してお  
りました又夫までは祐經々々どサモ憎くふに謂つてゐた  
れが赤木造の短刀を貰つてかゝ急に祐經殿と言も改り仕  
打も少老やはらかに成つたのは余り現金過ぎて不都合  
と○鬼王は祐經箱王は間と周旋して無事を取計ふ思入  
余程芝居氣を離れてやられたところは中々感心夫に以前  
の島山が頼朝へ諫言の長々しい間も始終手を突き頭を下  
げ側目もふらさに慎んでゐる、御注意誰しも斯きあり  
いこと此位の實を入れて貰らはねを泣たくつても泣けませ  
ん祐經箱王の御兩人あどさゆ折々互ひの氣脈が離れて仕  
舞ふには閉口々々○此幕の引皮と對面を一ツにして實録  
も狂言と取交せられた作者の脚色も誠に妙く鳴物其外まで始  
終對面の趣意を離れない處感伏し前へ廣仲重保の言語  
の内に脱目さく斷り言つておかれたが對面の併ひ大名の  
中へ矢張例の赤面の梶原だけ加へておきたかつた  
○道具替つて行實阿闍梨居間の場

四方田の嫡子椽坊丸工藤の家来江名井八郎と頼まれ箱王  
丸を暗殺せんと狙ふ處○椽坊丸先ッ大抵○障子明れを行  
實阿闍梨經文を讀んであり椽坊丸を叱り退け箱王が身の危  
きを恐れ其薄命を不便と思ひての獨語○居間にゐて休息  
の間にもいたせ經文を讀誦するのよ脱衣の不都合○此處  
へ北條時政の嫡子江間の小四郎義時入來り○此義時も大  
紋立烏帽子と切袴は不都合あり○兩人互に心底を探り合  
ひト、行實の箱王を男あし彼が本意を達してやりたさ  
際での所存ありと諭さおさたる友切丸の大刀を取出す此  
時下手の障子を明て箱王丸様子を伺つてゐる行實は其太  
刀を義時に示して其來由と告げいよく互ひの密意を語  
ふ折柄謀を行實箱王と顔を見合て俄ふ言を改め鎌倉殿へ  
の恐れ且と母の頼みもあれば箱王丸は出家させねむあ  
らぬが其出家を遂るにも血氣を押し短慮を誠て時節を待  
ねむあらぬと越王勾踐晉の疎讒の故事と引て他ながら意  
見を加へ出家を物憂く思はる今夜の内に下山せよと祐經  
に暗殺の企立あることを知らせ暗に北條父子と頼めと教へ  
る處○行實阿闍梨義時と長問答の内始終言語にたゆま  
く息込れば振ないところはサヌカ老功と○義時も落附て  
やられました○夫より時鐘にあり(行)アヤモウ入相

幸ひ空も雨催し(義)月のなまこそ宵闇の「暗き身されど人目を忍び」下山さきより湖水の汀を「廻れと一里の近路あり(箱王)残る方なき師のお恵み」へだての障子を明る此以前上手の廊下より江名井八郎出て櫓子を伺ひ居る此時箱王を見て「サテコソ箱王と切ッてかゝる箱王江名井を放附る義時これと引附け(義)たどへよ漏ぬ寸善尺魔(行)その身凶事のさい内に(義)早く此場を刀の切味江名井を突廻し友切丸にて振打ふ切下る(行)是も弟子も多(義)益なき殺生(箱)何から何まで(行)保ちのたさひと珠數めて拂ふ(義)江名井と切返す箱王の其刀を拭ふ(行)戒行マヤナマとこの見得にて又もや道具廻る○箱王行實義時兩人の密談を立聞の間障子を明てるも多此方へ目移のまて(行)(義)兩人は方へ見物れ心よす矢張り障子を立切ッておき此處に箱王の忍んでゐると云とを氣色で知らせる位にまた方か宜しかるべき○箱王此場の衣裳時代メイタ丸形縫の袂チロツと受ままた

○道具替ッて權現一の鳥居前の場  
 ○箱根權現一の鳥居夜の景色爰に箱王の下山と待伏したる椽坊丸箱王丸を目懸て切ッて掛る箱王と小瀬ちやつめと放附る是より椽坊は番傘箱王は懐劔よて立廻り正面

黒幕と切ッて落すと一面湖水の遠見傍の岸に繫ぎま吉船の中より打ッたる手裏劔椽坊の肩にグサト立ッ是はと驚く程もあく彼の苦舟の中第一助力の江尚の小四郎と聲を掛て北條義時「ッ」ときて出来り(箱)(義)兩人いろく言詰わり此處へ御師館の聲諸共に頼朝公馬上あて諸大名を引卒て下山とる路次義時箱王と見過て詰問ありト、箱王が椽坊丸の首をひき抜き力量を見て若や吾に仇あすとモヤとグツととる思入馬上あて幕外の引込行列三重にて拍子幕○此場別々評とる處なし只大歌舞妓とる

○三段目役人替名

北條相模守時政	中村嘉七
江間小四郎義時	同村福助
富田道三郎	嵐橋三郎
曾我我満江	中村雀右衛門
鬼王女房月小夜	同村紫琴
八幡七郎經氏	同村仲多藏
鹿島竹吾	川津多七
化粧坂少將	實川蘆雁
新造小ざらし	川一兒朝徳
同居若菊	雀一郎
同居おまん	雀二郎
曾我五郎時致	勝三郎
嵐	寛郎

○北條家箱王元服の場  
 ○三麟紋散しの金襴大櫛間を下し総て北條家大廣間の櫓様琴唄よて幕明と例の板附の腰元四人お定りの劇語あり

○幕明き早々小言をいふやうだが二重の上は腰元の併む  
だ處と板着てはなふて丸で店附き是と平舞臺お限りませ  
○爰へ當家の嫡子江間の小四郎義時下城なと腰元の知せ  
に因つて父時政白髪の巻立の織物の羽織着流しの拵へよ  
て出来り坐に若く義時父の底意を探らんこの爲に一度願  
は城と傾け二度願れを國と傾くると唐の李延年が詩れ句  
を書しる中啓を父に示して箱王丸を吹奉るを時政其隠  
察に驚き包むによしなくして其隠謀を明し箱王丸が加冠  
親たらんとを許す○義時落着たる仕打出來ました△然し  
父の隠謀を知て之と助る程の謀反心のある人とは見へせ  
○時政之思慮わりげなる老人ふと見へましたが見へせ  
傾け國を傾る程の人物とは見へせ△夫は調子の替りぬ先  
生も前幕の工藤祐經が平服で出て來たのかと思ひまし  
た○所へ箱王丸道三郎を連れて出にあり是より義時と箱王  
道三郎の兩人に父時政の加冠親許容のことを言聞せる時  
政は箱王の祖父伊東祐親父河津共舊故あることを言出て  
箱王と懇々慰撫する箱王道三郎は北條父子の思義に感じて  
歡を告る肅然ある物語○箱王別は評するどころもあし○  
道三郎は情愛あまひありたれども此人も調子の替らぬ人  
ゆる前幕の鬼土が面白いを附て出て來たやうな心持のお

りくしたのには玉環○折柄工藤の家來八幡の七郎鹿島  
の竹吾の兩人四方出祐長の男椽坊丸の敵箱王丸を出せと  
門前まで來りたることを執事れ者より注進のりしにつ  
箱王道三郎の兩人その兩人の使者を追還さんど花道へ  
出そを時政制して使者の應對と小四郎に任せおきて奥へ  
這入る引續て箱王道三郎も奥へ這入る○箱王は義時に一  
應の辭義もあく吾家へでも這入るやぢよツカくど這  
つたのいさ少し思入のありそぢなもれ○小四郎一人跡  
残り七郎竹吾兩人の使者を呼入れ叮嚀に來意を問ふ兩人  
之は附上り傍若無人に箱王と渡せといふ義時これを聞て  
始めの温和より引返して俄に態度なり飽まで烈しき挨拶をし  
て兩人を追逐と○義時始め柔を示す後剛を顯す調子の  
變る工合大出來と△高砂屋とととやかましのこと  
○兩人の使者は義時の明諭雄辭を取掛かれ一言半句の返  
答もあく始の虎の勢ひより引替へ鼠の迹るがごとく向ふへ  
這入る○七郎は氣味とかくして剛味と示めす工合マツ一  
通り○竹吾は七郎をさだめ義時と詫るゝの滑稽  
あかしく調子よく出來ました○義時兩人を見送りこなし  
あつて「世々尊いも主人の權威を以て願ふと親の  
長命を以て前の中啓を取上げ又もやこなしあつて」實は忠



孝は扇の地紙増へ劣らぬ天地金開くも憂むも心の要武門の望みはト持ッたる中啓と開くを相圖にテロン末廣シヤアナアと書たる詩の句を讀みながらの思入時計の音よて返し

○道具替ッて同奥庭離席の場

爰に北條時政が箱王丸を元服させる處上手に時政中央に箱王下手に道三郎三人とも見得よろしく○時政と白の素袍大紋立烏帽子上品な好いこしらへ○箱王も山形も木瓜の紋附し半素袍の拵へ急に年がふけたやきでその立派さ○道三郎袴を着られたので大層舞臺移りがよくありました○時政は箱王が首服を加へし顔をつくく詠め「鏡に寫る面影の亡父河津に生寫しハテ争これぬものじやアの語句あり箱王」スリヤ私志の面ざしが父祐泰に似升またかト道三郎共鏡に向ふこゑあつて是より三人河津の非命の終りと遂に懷舊悲嘆の相劇詞ありヤガテ時政ハイヤ加冠と祝し申ふさんと三室に載せたる烏帽子を取ッテ箱王に着せ夫より傍に置きたる行實阿闍梨が寸志に一刀友切丸と取ッて之に授け引續て己れが若冠の頃々着用して千軍万馬の間を往來るし數度の戰場に一度の不覺も取らざる小櫻おとしの鎧を取ッて之お與へ且と己の

名乗の一字を與へ五郎時政と名乗らす箱王と更きり道三郎も時政の重ねの思誼に感じて難有涙にむせふ處○

時政外に申分はあけれども肝心の加冠の式より太刀鎧の授與法少しも古習古方にもよらぬ太刀の柄頭を右の手にて無造作にひつ、かみて箱王の前に放出すごとく突やるところより鎧を両手お提げ是も放るがごとく置くのどサテく不作法千万余人ならばトもカンモ當時大阪の俳優中にて茶事其余風雅あることにも心掛けありて藝道にも格別心を用ゐるあらる、噂のある此人よして不注意の何事ぞや町々實々嘆息の至りに耐き遺憾々々○箱王は加冠して容顏のふけたるのみさして調子は變りし處も見へず時政が思誼に感じ父の非命を悲む思入も今少し然し男振と申分さし○道三郎と申分なし此人ばかり泣時と心から泣き笑ふと心から笑ふやきに思おれました○爰へ以前の小四郎義時衣服を改めて出來り時政の加冠を祝して乘替馬を贈る○義時烏帽子と冠らざると不都合○是より箱王道三郎の兩人北條父子に禮謝を述立歸らんとする折柄○道三郎の鎧を包むで背負し萌黄の風呂敷お山形も木瓜の定紋を染抜しは一寸と御注意○柴垣の蔭に袴股立の侍兩人あつたれ主人の敵と五郎と目掛けて切ッてかゝる時

致是をひつとらへて正しく四方田のト胸襟をグツとぎめ  
る兩人ハクツへ目にて倒れる時政「アツパン力量時致」乘  
打五免と道三郎と草ひ勇んで馬の口を取り時の鐘れ送り  
めて向ふへ這入○義時評する處もあけれどもエツマリと  
やられる處いかよも大舞臺○時政兩人の曲者と思はずし  
めころす工合妙○道三郎喜ひ勇ひ思入ハ至極なれども  
馬の口を取るのに飾を引いていつたのハ不即○一体この場  
の脚色と能狂言にていさそ元服會我よて（いとまきもの  
ことだが）中々大丈夫の涙の出る幕でその夫程に感心し  
なかつたのと残念三隊長共今少老芝居心を離れて實地に  
ありをましろ、ソといふ處へ本行と交せてやられら  
ら夫こそ鬼の目も涙でありましたらふにソコまでに至  
らなかつたのと残念ホイ残念が重ツタ△時政半素襖に鳥  
帽子道三郎が大風呂敷を背負ッて伴をしたところとドコ  
やと万歳の趣がありました○オットソソナ贅言とお癡止  
くく  
○道具廻ッて小動堤の場  
○鎌倉見たかの流行歌にて道具廻る大磯郭の新造仲居等  
少將が梶原の酒け相手も出てもりつぶされこれある惣籠  
の中へ兼てゐるといふ不答語としてゐる處上手より曾我

の満江鬼王の女房月小夜を連れて出て來り右の新造仲居等  
より提燈の火と借ることより吾子十郎祐成が廊通ひをす  
ら噂を聞き新造仲居等が上手へ這入し跡を見送り兩人思  
入あつて満江人の噂も聞及ぶ祐成が廊通ひホンあわら  
わが身の上は世も因果なものあらふぞいなアト愁  
ひのこかしあつて謎への相方にあり是より河津へ嫁入せ  
ぬ前原の小次郎を産み又曾我へ再縁あまて後の話を愁  
嘆の長言語月小夜は之を聞いてくくと其述懐と慰めヤガ  
チ郎へ歸んとする折柄○長言語の間おだやかよまて好く  
こたへ如何も大名の奥方らしく申分なき満江おれども  
白髪割に顔のこしら若く小紋縮緬の衣裳のあまり當  
世過て人品野卑く見へ可成の商人の後家とよりの請取れ  
ぞ今少し上代風も作ツたら夫こそ玉よして瑕あま○月小  
夜是も拵へいかよも粹に過ぎ夫よ満江よ十郎の取成を云  
言語もあまり人情を汲過ぎて大磯の廓の仲居で、もある  
らしく鬼王庄司左衛門といふ質直なる武士の女房とは見  
へ老然調子の好いのと感伏○愛ハ五郎時致以前のま、馬  
上にて道三郎を従へ上手より出來り是より親子ひさく  
の對面満江は時致と道三郎が誇り貌あるを見て先ツ道三  
郎よ向ひ「コレ道三郎喜へとい何ぞよしてやらのツヤ

箱王めが男は成りしとツチヤ喜ぶと思やるウト夫より又箱王に向ひめづらしや箱王丸法師に成りせで能も箱根を下山あし男は成つて見へしよあアノコ、な不孝ものめがど是より箱王に意見の長言詰めてど、河津が位牌ととりいだえ散々に折檻なま七生まで勘當と言懲し道三郎月小夜の兩人がいろく、詫るをも聞入る月小夜を連れて向ふへ這入る○瀧江は箱王を呵責の間あまり突込とぎす上品にやられ情愛もあり氣象もありいかさす曾我殿原の母らまく○時致の思は外ある母の勘氣に逆方よくれえ思入ドコヤラ小兒氣のあるところお持前のあまへた仕打能はまつて妙々○道三郎は主の不興に手持るさこあしよりいろく心支とる仕打脱目のあいところ奇絶と○是より道三郎之母は勘氣に愁傷せる五郎と諫勵しトもカクも郎にれかへりあり御舎兄十郎君とも御相談ありて拙者の部屋はお忍びあれと勸める五郎と之よ心と受直し再び馬お打乗り花道の附際までのお折えも翼をならべて空を翔る鷹音急度目をつけ「イカなれをこそ此箱王と己が父母は縁は薄さをかこち鳥にだもしかざるを嘆息とるこの時舞臺の駕籠の中より少將立出馬上の五郎を透し見て「テモ可愛らしいト徳慕の思入五郎其聲を聞答て不審に思

ひ跡を振顧る道三郎馬の口を取つて引立る少將のへ紙を取つて口よくとへるを木は頭よて幕(時)兩人幕外の引込みイ巨大舞臺々々々○箱根の場より此場まで頼朝を始め祐經鬼王時政道三郎瀧江お到るまで一々に其言語の内狂言の脚色を謂とせ女小兒おもよく含込分るやうとせし作者の注意感伏と、此幕切の曾我物語もある兄弟が鷹を見ての述懐を書入と尤も奇あり只此幕切に舞臺の真中に立派ふこしらへおきたる庚申堂より何人もいできりまど作者のぬかりにりよもあるまじ全く役者のづるけしもれか何にしる物足らぬ心地がいたしました

○記者伏て申と此次の幕より大切までを下冊となお引續て兩三日の中出版いたまされを上册御一覽の諸君はおんもどめの程ひとへに希ひ奉り升

役者人名

- 半鼻山人 一眼翁 豆田野勢夫 六二居士
- 芝井金太郎 四倍井敷奇也 阿那尾 勇
- 半場劇史 芝井猫人 半四野夫 雑魚場市入

定價五錢五厘

明治十二年四月十一日御廨  
同 四月 出版

編輯兼出版人 東京府士族 戸倉 忠雄

當時府下北區常安町廿番地  
橋本絹方寄留

京町堀通五丁目三十番地  
假本局 金 蘭 社

南地法善寺南横町廿三番地  
之心を珍報

製本發賣元 華本文昌堂

取	心齋橋通久寶寺町	前川源七
同	八幡筋東へ入	玉置清七
堂	島中壹丁目	靜雲堂
備	後町中心し	泉万助
所	平野町御靈前	松本平兵衛
	高麗橋詰町	不朽堂

